

## 「牡丹灯記」受容の系譜 (二)

太刀川 清

話など遠い筑前の国には確かにあったのである。

紫女が狐であったことは、西鶴自身の明かにするところではなかったが、『太平広記』の「劉元鼎」(巻四五四・出西陽雜俎卷十五)に「旧説野狐名紫」、また「陳表」(巻四四七・出搜神記)には「狐者先古之姪婦也、名曰阿紫、化為狐、故其怪多、自称阿紫也」などとあることから凡、その辺りの察しがつくところで、紫女は実は姪婦が狐に化したものだったのである。一体、狐が女人に化して男と契る類いのことは、狐の怪談を繕けば実に多い。しかし女人が狐になる例はあったであろうか。ここは女人が一度は狐に化し、そして再び女人になって男と契るといのである。さきに「陳羨」には「名山記」を引きこれが『御伽物語』(延宝五)にも「名山記に、先古姪婦あり、名を紫といふ、化してきつねとなる」と書り(巻三)とあり、後には『和漢三才図会』(正徳三)にも引かれるところとなるが、わが国の怪談にはそうした例は見られない。しかもその狐も姪婦故いのもというから、死後に悪鬼となり、なおも奸姪をほしきままにする「牡丹灯記」の符女に通じるところがありはしまいか。その狐の紫女に符女を撮合したところに西鶴の人間臭い諸国話の「牡丹灯記」が出来上ったのである。

渡来した「牡丹灯記」は『奇異雑談集』に翻訳されて「女人死後男を棺の内へ引込こらす事」となり、翻案されて『伽婢子』の「牡丹灯籠」となった。そして『諸国百物語』では「牡丹堂女のしうしんの事」となって怪談会の話となり、さらには『剪灯新話句解』の和刻本、和訳本の『靈怪草』まで加えて、寛文、延宝の交までに、わが国への紹介のてだてのすべては終わったかのようであったが、ますます盛んになる怪異小説流行の中で忘れ去られるようなものではなかったのである。「牡丹灯記」一話を掘りどころに何かと想を構えては流行に棹そうとするのが、その後の怪異小説であって、怪談とは裏腹に現実の世界を追うことに急な西鶴までが、それに関心を示さなければならなかったところにも「牡丹灯記」の巷間での関心の大きさが窺え得るのである。

『西鶴諸国はなし』(貞享二)の「紫女」(巻四)はその西鶴が「牡丹灯記」を、いま流行の諸国話として扱ったところに意義があった。諸国話は当時あって決して架空の作り話ではなかったからである。西鶴にすれば「国々を見めぐりてはなしの種をもとめ」(序)たその話は不思議なことでも奇異なことでもなく、狐が美女に化けて男のところへ通う

したその人ではない。そこに現れる女は、「いまだ脇明けしきぬの色、紫を揃へて、さばき髪を真中にて、金紙に引きむすび、此美しき事、何ともたとへがたし」と、当世の風俗になじむ美女の面影こそあれ、幽鬼のもつ陰翳など微塵もなく明かるい。同じ美女でも『伽婢子』の「牡丹灯籠」のそれが王朝世界の風情を漂していたのとは全く違って躍動する当世美人の面影がある。その明かるさが行動にも出て「切戸おし明けて、はしり入り、誰でもさはったらつめる程にと、しどけなき寝姿、自然と後むすびの帯とけて紅の二のものほのかに見え、ほそ目になって枕といふ物ほしや、それがなくば情しる人の膝がかりたい迄」と、浮世草子ならではの写実的な描写となる。伊織もいやと言われぬ首尾に契りを重ねるうちに次第に衰弱して行く。それを薬師の道庵に見咎められて、世間で言う紫女の仕業であることが教えられ、斬ることがすめられるのである。紫女が「人の血を吸ひ、一命を取りし事ためしあり」と、禍いをもたらすのも『伽婢子』で「忽に真精の元気を耗し尽して精分を奪はれ、わざはひ来り、病出侍べらば薬石鍼灸の及ぶ所にあらざ」と言うところ、さらにはその原拠「牡丹灯記」の先蹤のあったことを見逃すわけにはゆかないが、吸血をもって禍根としたところがいかにも現実的である。

さればまた薬師の道庵は「牡丹灯記」の隣翁であり、これに玄妙観の魏法師を重ねた人物となる。しかしここで法力に頼る法師とせず、これを薬師としたところが、これまたリアリスト西鶴らしい処置であったと言らべきである。伊織は道庵の教えるところに従って女を斬る。切り捨てることでい禍から逃れようとするのは、それが狐の仕業であり、「薬石鍼灸の及ぶ所にあらざ」となれば、斬るよりほかにすべはなかったのである。神仏に頼らず、斬るという拳に出ることを西鶴の新しさと取沙汰するむきもあったがこれは必ずしも正しくない。

かくして狐の紫女は逃れて、すみかの「橋山のはるか木深き洞穴に入

る」ことで話はおわる。要するにこれは橋山にすむ狐が里に出て男と戯れた話であったから、「紫女」の話は「牡丹灯記」の幽霊話とは本来別の系列の説話であったのである。しかしこの狐の怪事に西鶴が敢て「紫女」と名づけたのは、かつて姪婦であった狐が己の習性から逃れ得ず、夜な夜な男をもとめて里に下るところに当今の姪婦の相をみようとするところにこの話のモチーフがあったと言わべきで、祖を異にする狐の話が西鶴の手によって併されて「牡丹灯記」の諸国話が出来上ったのである。

## 二

その狐の美女がもう少し「牡丹灯記」の符女に近づいたらどうだろう。都の錦の『御前御伽婢子』(元禄十五)の「山科にて狐と蛇女に化してたがひに妬あひし事」(巻六)である。

元禄年中に杉沢新之丞と聞えし人、世を厭ひて山科の辺に引籠りたりしが、ちかきころ妻を失ひ唯一人鰥にてあかしくらす。

これがその冒頭である。杉沢新之丞という名は『伽婢子』の萩原新之丞に類似する。これが愛妻を失って無聊をかこちながらその日その日を送っているのも似ている。その新之丞に狐と蛇がそれぞれ女に化けて契るが、それが互に嫉妬しあう。まず蛇の常子が正体を現わして退けられたあとは、狐の化けた牧子は思いのままに新之丞に通うのである。因にこの牧子の名も『伽婢子』の「歌を媒として契る」(巻八)の女性と同名である。さて、新之丞・牧子の関係がつつくうち、

其隣に唯一人住て物よく心得たる翁あり。ある夜、新之丞所用ありて、外へ出たる間にかの翁、壁の少し破れたる所よりのぞき見けるに、牧子忽ち狐となり、庭に走り出、略を取って来て食ひぬ。其数いくらともしらず。新之丞かへりける足音を聞て、頓て又元の女となりぬ。翁見て興をさまし、夜の明るを待ち新之丞に近づき、御身が家な

る女は何として養ひをき給ふと聞へば、新之丞あからさまに語らず。翁いはく嗚呼御辺の災有り、夕べ我壁の透よりうかがひしにかやう／＼の様子なり。彼はよく人をして惑はし正気を奪ひ吸ふ。速かに退ずんば御身の命あやうからん。

と諭される。もともと幽霊でもない牧子が正体を現わすのは、本来の狐の姿となってひそかに略を取って食う習性からであるが、結局はその習性が仇となつてうち殺されてしまう。ここにも己の習性を遁れず破滅する狐がいるのである。さて、その死骸はと見ると、

新之丞立寄つて是を見るに頭にしやれ首をいだし小袖をみへしは芭蕉の葉なり。彼の帯一筋棚に有りしをおろし見けるに、手にとるやひとしく、ぼろ／＼と崩れて土のごとく成りぬ。

「牡丹灯記」を狐の怪事として扱ったものであるが、これには『伽婢子』の「狐の妖怪」(巻二)の影響が強かった。この話は、女が狐であることを知りながら家に迎えた割竹小弥太は、妻にも狐であることを内証にしていたが、京より下った知行の石田市令助がそれを金子百兩にて妾にした。半年ほどして京に上った石田を見た高雄の祐覚僧都は、石田が妖怪に精気を奪われ命の危いことを知らせ、それを救うために壇を飾り祭文をよんで禳したところ、女は正体の古狐の姿を現わして死んだ。この話の末尾は、

首に人のしやれかうべを戴きて落すしてあり。此の女の手より人に遣はし手へたる物ども取よせてみれば、絹小袖と見えしは皆芭蕉の葉、白粉といひしは糠埃也。針かとおもひしは松の葉也けり。

『御前御伽婢子』の末尾もまたこれによつたものであった。芭蕉の葉が美女に化したり、それが人間と交わる話が中国に多いことは沢田瑞穂氏の説くところで、雨に首を立ててしなやかにびく緑豊かな大きな芭蕉の葉は「紅裾翠袖」(牡丹灯記)という美女の衣裳を連想させるに十分である。芭蕉を背にした美人の姿など妖しい幻想に幻想を生むもので、

この種の話の結末には相応しいものである。

浅井了意が『剪灯新話』によつて『伽婢子』を著したのを、いたく羨望した都の錦であったから「牡丹灯記」への関心は並一通りのものではなかつたようである。さりとて「牡丹灯籠」の一番煎じも潔しとしないうこの人は、「狐の妖怪」を借りることで、「牡丹灯記」の幽霊話を狐の話にかえてみせたところはさすがであった。

### 三

『御前御伽婢子』の話では蛇の常子は狐の牧子のために斥けられたが、「牡丹灯記」の符女を蛇の化身とする話もないわけでない。元禄十年刊の『善悪報はなし』の「女あひしうにより蛇となる事」(巻三)があり、この話は『諸国百物語』(延宝五)の「渡部新五郎が娘若宮の児におもひそめし事」(巻三)に廻り、さらには『沙石集』の「妄執ニヨリテ女蛇ト成ル事」(巻七)にまで到る。

鎌倉のある人の娘、若宮の僧正坊の児に恋をする。父母のはからいで時折りは児を迎えたが、なじみもうすく娘は思い死にってしまったので、骨を箱に入れてしまつておいた。その後、この児も病にかかり一間に籠めておくと話し声がある。父母が覗くと児は大蛇と対坐していた。やがてこの児も死ぬ。骸を葬うとすると棺の中には大きな蛇が児にまつわりついていたので、共に葬つてやつた。その後、娘の骨を善光寺に分骨しようとして箱の中を見ると白骨は蛇になつたりなりかかつたりしていた。

この話は死んだ娘の愛執が蛇となつて児にとりついた話で、特に「牡丹灯記」に付会させることもなさそうであるが、話し声のするのを不審に思つて覗くと児が大蛇と対坐していたこと。葬うとすると棺の中で大蛇が児にまつわりついていたなど、そのプロットには「牡丹灯記」に類似するところがある。『剪灯新話』が渡来し、「牡丹灯記」がいろいろ

と変形していく過程で見過せないもので、幽霊話の妖怪譚への接近が見られる。これが、近世に入って『諸国百物語』に採られると、娘は鎌倉の渡部新九郎のひとり娘となり、大蛇となって児と物語するのを見た父母は僧山伏を招いて成仏をはかることになって、より「牡丹灯記」に近づき、『善悪報はなし』では正保年中の話となって語り伝えられて来るなど、ここにも「牡丹灯記」に似たひとつの説話系列がある。さきの狐の場合と併せ考えると「狐は人に化し、人は蛇に化す」という伝統的な化身譚のせいか、蛇と「牡丹灯記」との係りはこれ以上に出るものではなかったらしい。仮りにあったとしても『伽婢子』の「牡丹灯籠」にあやかった『拾遺御伽婢子』(宝永元)の「毒蛇人に化して契る」(巻一)程度のもではなからうか。

色好みから定まる妻ない佐田源内は春の一日、友人と志賀の桜を眺めての帰るさ、女どもの遊興する中に、年の程十七八ばかりの女を見て心ひかれていると、女の童に招かれてその女と馴れ睦むことになる。女は素姓を明かにして自分の住家に案内する。そこには女の姉がいて、それにすめられて源内は女と結婚するが、その明け方、家中が騒しいので起き出すと岩窟の中であった。驚いて家に帰ったが心地悪く臥している。ある朝、衾をとってみると、全身の肉が溶けて白骨のようであった。一族は不審に思い岩窟をたずねて見ると毒蛇のいた跡があった。

## 四

再び狐の怪事にもどる。『太平百物語』(享保十七)の「小吉が亡妻毎夜来たりし事」(巻三)もそうで、これは男の亡妻への愛執の甚しいのにつけ込んだ野干(狐)の仕業であった。

伊賀に小吉という者がいた。借老を誓った女房を病で失い、悲嘆のあまり自害しようとするのを人々がおしとどめたものの、いまでは一室に閉じこもり、明け暮れ亡妻のことばかり思いつづけている。ある夜、そ

の小吉の寝間で話し声のするのを、老母が不思議に思い、のぞいてみたが小吉一人の姿しかなかった。こんなことが毎晩／＼続いて小吉は瘦せ衰えて行くので、さまざまの療治や祈禱がなされたが効めがなかった。そこで北山の道徳堅固の律僧を招いて、小吉の容態を見せたところ、その言うことには、

誠や御身近頃愛室に後れ給ひしに、猶も亡魂御身に付きそひ給ふとやらん。いとしほらしき事にこそ侍れ、然れども未だ其虚実分明ならず、是を正しく知るに、われ一つの靈符あり、今宵亡妻来たり給はゞ、此封せし物を折よく出だし見せ給ひ、いかなる物や此内にある。さして見給へと問ひ給へ。真実おことの妻ならば、必ず知って答へ給はん。若し又答ふる事能はずんば、野干魔魅の類ひ、御身をたぶらかし申すなり。御身とても此内を見給ふ事、努々あるべからず。

と小吉に与える。小吉が教えられた通りにすると果たして幽霊は近づくことが出来ないでいる。次の間に控えた律僧がすばやく悪魔悉除の法を修すと、幽霊は白狐となって失せてしまうのである。律僧は、妻はずでに成仏しているにもかかわらず、亡妻への愛執の念の著しい小吉に狐が取り憑いたのであった。僧の教誡に従って小吉は心の迷いを去り、家業に精を出し、老母をいたわり亡妻の跡を弔ったので、後々家は繁昌することになる。

## 五

小吉の亡妻はずでに成仏していたが、男の愛執にひかれて成仏出来ないで中有に迷うものもある。時代は少し遡るが、『御伽比丘尼』(貞享四)の「水で洗ふ煩悩の垢」(巻四)もやはり「牡丹灯記」の変形であった。

武州品川の辺に庄八と言う米屋があった。さる武家に仕えていた綺量よしの女を迎えて妻とし、契りを結ぶのも東の間のこと、妻は病を得て

程なく空しくなってしまった。庄八は悲嘆にくれて臥していると、ある夜忽然と亡妻が姿を現わし、在りし日さながらに睦言を交わして帰って行った。そうした事が毎夜続いたので隣に住む庄八の親は不審に思いある雨の夜、いたうふけてまどより内をさしのぞけば、庄八されたるかうべに打むかひ哭つ笑ふつ物のがたる。さればこそと残ましくおぼえければ、其ほとりに徳行すぐれいとたつき上人のおほしけるに参りて、かやうくの事の侍る、あはれ然るべき御教化をまなし給はれかし。

と哀願する。しかしこの上人は魔除けの御符を与えるようなことはせず、庄八の背に冷水を浴びせかけるのである。すると髑髏は消え失せてしまふ。

此時上人は庄八にむかひ、浅ましきかな己が輪廻執着の一心にて、亡者にもくるしみを増し、くらきより猶くらきにまよはしむる。されば今爰にあらはるゝは、まよへる物から、もとの女とぞ見えつらん。只されたるかうべにてありき、爰に清浄の水をかけてぼんのふの山のにごれるをすゝぎ正念にかへらしむる時、又更に消てされこうべなし。夫の庄八の執着のために亡妻は成仏出来ないでいるのである。上人はその庄八に冷水を浴せて煩惱を解脱させて亡者を苦しみから救うとする。したがってこの亡霊には「牡丹灯記」の符女のような恐しさはなく、怪談の恐怖感より仏教的な教誡が強く出ているのである。「牡丹灯記」もこうして煩惱の解脱、執着の戒めと言った教訓話に仕立てられているのである。

『御伽比丘尼』はいわゆる西村本である。仮名草子の伝統を遵守する西村本の立場からすれば「牡丹灯記」にこうした教訓話としての処置もあり得ることであった。

六

『伽婢子』の典雅ともいふべき翻案ぶりを見ては、「牡丹灯籠」の向こうを張るものもないままに、「牡丹灯記」の構想の一部を採っては他の話の翻案に役立てようとするものも現れた。

辻堂非風の『玉すだれ』(元禄十七)の「直江常高冥婚の事」(巻六)は、唐の小説『才鬼記』所収の「曾季衡」の翻案で、『伽婢子』でも「祈りて幽霊に契る」(巻十)としてすでに翻案されていた。『玉すだれ』のこの話は、その「祈りて幽霊に契る」に因んだものであるが、翻案の過程で「牡丹灯籠」はなくてはならないものであった。

「祈りて幽霊に契る」の上野国平井の城は『玉すだれ』では石州の津和野城となり、北条新六郎は、和泉寺の嫡男常高となり、この城を守っている。上杉憲政の息女弥子は前の城主のひとり娘となり、近国無双の美女であったがすでにこの世の人ではない。その噂を聞いて常高は娘に寄せる熱い思いを詩に賦すと、その娘が現れて歌を唱和する。常高は「たとへ魔縁化生の者なりともかかる人に一夜もそひてこそ此世に生まれし本意」と考え、招きに応じて亭に入り契りを交わす。ここまでは「祈りて幽霊に契る」と全く同巧であるが、このあとが「牡丹灯籠」と係わるところで、木越治氏の言う「牡丹灯籠」の類話ということになる。常高の様子を不審に思った近侍の武士上木八郎は、

我きゝつたふる事ありと、かの亭に忍び入、壁を少しつき明てこれのぞくに、常高一連の骸骨と手枕をかはし、さまくのむつ事をかたる。その傍にときほうこの、人のごとくにうちわを持、これをあぶぐ。八郎が壁を穿てみたものが骸骨と欲昵する常高であったとは、明かに「牡丹灯籠」である。そしてそのあと八郎の幽霊が禁忌すべきものであるという件についても「牡丹灯籠」のそれに倣うものであった。

凡人死しては陰に帰り、受生の間は中有にまよひ、此氣役病となり、

或は氣にのっとりて祟をなす。陰氣陽に克時は種々の姿を顯はし、異形の狹ひあり。これ全く求めて来るにあらず、我が心と生ずるところ也とこそ承り候へ。

こうなれば翻案は「祈りと幽霊に契る」をはなれて、そのまま「牡丹灯籠」になつて行くことになる。

戒められるままに二十日ほど過ぎたが、常高はかの娘が恋しく、例の亭に赴いたところ娘は常高の手を捉えて誘い入れる。夜が明けても帰って来ないのを案じた八郎は、その亭に押し入つてみると、

遙か筑山の陰を過て、岩際のかぐれに一つの卵塔あり、ゆきて見るに石の以、四辺の垣となし、同じく青めの石にて卵塔の戸びらを立たり、その扉の合めに小袖の裾少みえたり、頓て大勢立かゝりてひらきみるに、さも結構なる棺に、一具の骸骨をいだきて、常高前後もしらず伏たり。

そこで、八郎が常高の目を醒させようとすると、「おどろかすは何者なれば、わが遊興を妨ぐるにぞ遺憾なれ」と刀に手を掛ける常高であったが、助け出されて危き命を救われるのである。末段にこそ作者の創意が見られるが随所に「牡丹灯籠」を援用しての「首季衝」の翻案であった。

## 七

この『玉すだれ』の話は八年後の正徳二年には都の錦(往悔子)が「嵯峨の妖精(巻六)」として『当世智恵鑑』に収めることになる。都の錦にすれば『御前御伽婢子』について再度の「牡丹灯籠」の採用であったが、今回はむしろ『伽婢子』の「牡丹灯籠」への関心からであった。

『玉すだれ』の常高を洛陽東山に住む風雅を愛する嶋田又七に、前の城主の娘を素姓明かでない美女にかえて別話を装ったものの、行文にそれとわかるほど「直江常高冥婚の事」に倣ったものであった。目録には

「美男は損あり形は疲、白骨の執心うたゝねの秋」と傍題するが、その美男の又七は、或る時嵯峨のあたりを逍遙しての帰るさ、桃林の中で二十才ばかりの美しい女房に会う。そのかたち清げになまめいたところは、まさに高貴の人の女と見えた。これに誘われて又七は優雅な屋敷に到る。又七はこれが魔縁化生の者と思ひながらも淫欲もだし難く闖入る。かくすること数ヶ月、又七は「質憔悴」として神氣を奪はれ眼おち入て死体の如き有様となるのを、友人が不審に思ひ妖怪の仕業であることと教える。

さればこそ妖鬼御辺の精を奪へり、およそ人死しては陰に帰り受生の間は中有にまよひ、此氣役病となり或は氣にのっとり宗となり、陰氣陽に克時は種々の姿をあらはし異形の狹あり、是全く求めて来るにあらず、己が心より自然と生ずる所なり。

と、友人の是心は又七を養生させ、ただ一人かの屋敷へ行く。右の引用も『玉くしげ』とほぼ同文であれば、このあと屋敷で妖怪に退散を促すところもそうである。その夜、是心の夢に、女は枕上に立って、

我死して三年に及ぶまであまねく都の地を逍遙す、されども年比、此山里に住なれて猶執心はなれやらず、たま／＼前世の縁ありて又七殿にまみへながく同穴のちぎりをむすばんと悦びをなせし所にはからずも、御身に避けられる口をしさよと、たちまち面色変りて鬼女となり是心に飛つかんとする時、枕元に立たる刀につまづき倒るを見て夢覺ぬ。

因にこの個所を『玉くしげ』につけば、語句の変りこそあれ行文ほとんど同じである。

我死して五とせ、世界に逍遙す、しかれどもとし比この所に住なれて執心はなれやらず、たま／＼宿世の縁ありて、人にまみえけるに、ながく偕老のちぎりをなさむと悦びしに、計らずも汝にへだてられつる恨めしさよといかれる姿、面も替りてすさまじく、はしりかかると、

枕本に立たる太刀につまづき倒るゝとみえて夢さめぬ。

かくして有験の山伏を招いて祈禱してもらい、十日ばかり過ぎた夕暮、又七は例の女がやたらに恋しくて出掛けて行く。夜が明けても帰って来ないので、是心が嵯峨に行つてみるたが、かの屋敷は跡形もなかった。

妖怪の所為かとあたりを見ると、山の木陰に卵塔があった。

近く寄て見るに石を以て三方の垣となし、同じく青めの石にて卵塔の扉を立たり。其戸の合せめに小袖のつまし出て見へたり、是心彼是立かゝり扉をひらき見れば、一連の骸骨と又七手枕をかわし前後も知らず伏たり。

是心らが又七を起こすと、又七は怒つて「何者なれば我が遊興する所を妨ぐるこそ奇怪なれ」と、脇差しに手を掛けるのを取り抑えて家に連れて帰つたが、口もきけず衰弱して行く。しかし高僧の祈禱の甲斐があつて回復するのである。

『玉すだれ』の模倣と言うよりは剽窃と言つた方がよさそうであるが、二つに違いがあるとするなら『玉すだれ』には「祈りて幽霊に契る」の先蹤があるから、石州津和野の城にかかわるいきさつが前段にあつたことである。そこを除けば『当世智恵鑑』のこの「峨峨の妖精」となる。そしてその二つがどうしても離れることが出来なかつたのが『伽婢子』の「牡丹灯籠」であつたが、その典雅な翻案ぶりは真似て真似られるものではなかつたようである。その「直江常高冥婚の事」や「嵯峨の妖精」に、もし「牡丹灯籠」を凌ぐところがあつたとすれば、男に寄せる女の執心の激しさと、その執心を遮ぎろうとする者に対する激しい憤りが見られることではなからうか。「牡丹灯記」の妖艶な幽霊もこのあたりから怪談の主人公らしい情念の激しさを具いて来るようである。「牡丹灯記」の幽霊が陰湿さをもつた、いわゆる日本的な幽霊への転身の傾向があらわれはじめるのである。

変形に変形をつづける「牡丹灯記」には、なぜか侍女金蓮の存在がなかった。すべては喬生と符女の妖しい物語の展開の相で捉えられているのである。「牡丹灯記」の話の中心が金蓮と名づけられて生命ある存在となつた冥器婢子の怪異であると言ふのは高田衛氏であるが、「伽婢子」と書名した了意は意外にもその事実を知つていたのかも知れない。しかるに以後の追従作はその意のあるところを知らないままに、単なる幽霊物語として「牡丹灯記」を捉えていたのである。実にひとり歩きを始めた「牡丹灯記」の姿がここにあつたが、それなりの理由がある。

それは「牡丹灯記」の末段を省き考慮しないものの当然の帰趨であつたからである。末段は鉄冠道人の前に引き出された喬生、符女、金蓮三者の供述と道人の判詞で、その判詞にはそれぞれに対する批判がある。

喬家の子生きて猶ほ悟らず、死すとも何ぞ恤へん。符氏の女死して尚ほ貪婬なり、生ける時知るべし。(原漢文)

喬生、符女の邪婬にしても、それが邪穢なものとして責められるべきそれほどの理由をもたなかつたことは『剪灯新話』の他の冥婚物語の例から明らかである。したがつて道人の判詞の語気もさほど強いものではない。しかるに金蓮に対しては、

沉んや金蓮の怪誕なる、明器を仮りて以て矯誣し、世を惑し民を誣ひ、条に違ひ法を犯す。(原漢文)

つまり金蓮のようなものが、明器を仮りて世人を惑し誣している。これは条理を逸し、違法も甚しいものであると痛烈に批判しているのは高田氏のいわゆる淫祠妖廟の信仰に係わるところであらうがここには明かに諷世の意がある。かつて近藤春雄氏が「牡丹灯記」を基だ異色の作品だと言つたことがあつた。<sup>(註4)</sup>この種の話は本来団円に終わるはずのもので、

喬生が符女の棺中で死ぬのは正に愛情の達成と言ふべきで、だから仲よ

く手を携えて歩くことになった。ところが話はそのあと道人を登場させて、それを邪悪なもの、人を害するものとして九幽の獄におしこめてしまったというのである。すなわち伝奇世界の愛情物語を一転して邪悪糾弾の物語に変えてしまっているところに異色性があると言うのであるが、結局その異色性も金蓮の存在によるところが大きい。

したがって金蓮の供書は喬生、符女とまた趣を異にしていた。喬生が「事既に追ふなし、悔ゆるとも將た奚ぞ及ばん」(原漢文)と、符女が「迷ひて返ると知らず、罪安んぞ逃るべき」(原漢文)とすでに反省の色を見せているのに対して、金蓮は、

某殺青を骨となし染素を胎と成し、墳壙に埋蔵せらる。是れ誰か備を作って用ふる。面目機発、人に比するに体を具へて微なり。既に名字の称あり、精靈の異に乞しかるべけんや。因て計を得たり。豈敢て妖をなさんや。(原漢文)

この青竹を骨として白い紙をはった明器婢子は、金蓮と名まで得て妖異をほしいままにすることを、道人の前で広言してはばからないのである。もはや救いようのないものであった。そう言えば「牡丹灯記」に於いて喬生と符女の邂逅の手だてをなしたのも、双頭の牡丹灯を挑げたこの金蓮であったし、喬生を湖心寺に引き入れたのもそうであった。

かくして金蓮の存在の意義の大きさを知るのであるが、ここを解することのなかった浮世草子の「牡丹灯記」はついに喬生、符女の幽霊物語は終始してしまつたのである。

## 九

しかしその「牡丹灯記」の末段は別に活用されていたのである。かの冥府の件りは『奇異雑談集』では、その内容を省いて、「道人ことばをもつて、かしゃくする事や久し、三人のゆふれいみな諾伏していはく、あへてふたたびたりなし人をわすらはす事、あるべからずといふ

て、押しさつて見えず」とだけ言つて終つたところ。翻案の『伽婢子』に至つては、仏事を営むことで三霊は仏成しておわる。思うに喬生と符女の妖艶な物語の末段を、かりに冥府の閻魔の場に変え得たとしても、これまで進めて来た情緒的な雰囲気を壊すことにもなりかねない。それだけではない、この末段はそれだけをとりあげても、いわゆる地獄物語として、結構ひとつの話が出来上るところで、了意が扱つたとすれば、それなりに筆を費したであろう。すると「牡丹灯籠」の前段はあえかな幽霊物語、後段は冷酷な地獄物語とそれぞれに主題を持った話が並列されることになる。短かい話で控えなければならぬのは主題の分割である。了意の案じたところもそこであつたらしいが、その後段にこだわつたのが、まず『玉簪木』(元禄九)の「入定奇瑞」(卷三)であつた。

備前国岡山の風俗、女子婦人殊の外花奢風流を好み、容を飾り香を竭す、貴人高家ますます色を重んじ美女を訪ね、一度艶道を得る時は必ず人に誇り街ひて自慢せり。春は花見または盆中灯籠遊覧の頃、このほかすべて寺社詣で見物の庭などには、富貴の妻女娘など殊更にかたちづくりにして、多くの群集の中をはづる気色もなくなまめき歩く程に、若き男子其目もあやに眺めやりあるひは手とり袖をひきて愧ぢがはしき事どもあれど、かかる習はしにて誰怪しむ者もなかりける。こうした雰囲気の中で、城下の商人中西九右衛門は美しい妻を迎えて評判となる。隣家の竹内権平がこれに横恋慕する。九右衛門の妻も美男の権平に心ひかれて、二人は密かに通じるところとなつた。そこで二人は邪魔になつた九右衛門を亡き者にしようと謀り、権平は異形の姿を作つて頻りに九右衛門を脅す。恐れ戦いた九右衛門は悪寒発熱して懊惱著しく、次第に弱つて行く。薬治、祈祷も効のないことを心配した一族は、城下を隔たること十八里、密宗の高僧了願上人を訪ねて哀願する。上人が「われ此の深山にかくれてより、高家貴人の召しにも応ぜず、すべて人間界の事にあづからず、急ぎ帰るべし」と辞退するが、なおも哀訴す

るので上人は止む得ず護摩壇をかざって祈祷を始める。

了願上人は「牡丹灯記」の四明山の鉄冠道人であった。それが固辞するのと同じである。しかしこの上人は道人のように符吏を使って妖鬼を捕いさせるようなことはせず、九右衛門の過去未来の因縁を知るために自ら入定する。すなわち「牡丹灯記」の冥府はこの上人の入定にかえられたのである。入定した上人の見たものは、地神の堂舎の前にひざまずく九右衛門の祖父九太夫の姿であった。地神は積不善の孫が冥罰を蒙らなければならぬ罪状を説く。しかし九太夫の孝心と慈悲心が孫の延命を認めさせることになる。ついで権平の冥罰が告げられる。果たして九右衛門は祖父の陰徳で存命し、権平は狂死するのである。

死後の世界を窺うに入定と特異な事実をもってしたところに新たな着想があったのである。文会堂と号して京で書肆を営む林義端は伊藤仁斉の門下、夙に学問好きの漢学者であったから中国小説にも心を寄せ、頻りと怪奇談を嗜む風があった。件の了意が『剪灯新話』に取材して『伽婢子』を著したことを羨望して、その遺稿を求めて自ら序を識して『伽張子』(元禄六)を刊行するほどの熱心さであったから、了意の省いた「牡丹灯記」の末段の翻案を敢て試みるなど、この人にしてありそうなことであった。

十

『玉簪木』の「入定奇瑞」で扱ったのは、「牡丹灯記」に就けば、喬生らの罪科を糾す冥官の判詞の翻案であったが、彼らが冥府で受けなければならなかった苦患を敷衍したものはまた別にあった。すなわち「牡丹灯記」で、符吏に首枷され鎖に繋がれ冥官の前に引き出された彼等を叙して、「鞭以箠揮朴流血淋漓」とあるところを膨らませたのが『怪醜夜光魂』(享保二)の「慈照寺山の送火」(巻四)である。

この話の冒頭は孟蘭盆ではなく、慈照寺山の大字に群がる人々であ

ったが、確かにここも「牡丹灯記」に拠っていた。

都慈照寺山の大字は弘法大師の書する所にして今にたえず。其外妙の又は舟のかたちなどをともして七月十六日の晩は家々の送り火、鴨川の辺は群集して是を見る人多し。西の京に山田半七といふ者あり、此三年前妻におくれ、そののち妻を持ず、けふ文月十六日に慈照寺山の大字をこころざし、まことや大の一字四十間に及び左の堅は八十間、右の方は六十八間あるよし、山へ上り火をともし様子もくはしく見るべしとて、夕方よりたゞ一人宿を出、大字山へとあゆみし。

その大字を見ての帰り、半七の前に現れたのは牡丹の灯籠を挑げた女ではなくて、小さな提灯をさげた僧であった。この僧に導かれて、とある庵に到る。僧は半七にどんな恐しい事を目にしても決して声を立てないようにと戒めて去る。しばらくすると鬼のような異形のもの二十人ばかりが現れて座につく。上座の異形が手を拍つと、痩せ細った女が次々に出て来ては念仏やら題目を唱えて去って行く。その十一番に現れたのが、顔も青ざめ痩せ衰えてはいるが、確かに半七の亡妻であった。

亡妻の生前は仏神への信仰心もなく、親不孝でしかも夫をないがしろにする。それに悋気深い女であった。そのためいまは地獄におちて現世での責めを負っているのである。女は裸にされ背中を裂れ、灼熱の玉を鉢の上に置かれて苦しんでいる。この様子を見た半七は、僧の戒めを忘れて怒り狂ってとび出すと、辺りのものはすべて消え失せて、ただ松風ばかりが淋しく吹いているのであった。

妻に先立たれた半七、提灯を挑げた僧に導かれて庵に到る半七、ここまでは明らかに「牡丹灯籠」に従っている。しかし次に展開する場面は、あえかな閨情のそれではなく、恐しい冥府の場面であった。これを「牡丹灯記」に就けば、冒頭から一気に末段の冥府の件りへと直接すすんだことになるが、この話は要するに地獄物語である。一体この種の物語はつまるところは因果応報を目のあたりにさせて、そこに教誡の意を

含めようとするものであるが、この半七もその例に漏れず、家財を捨てて亡妻の跡を弔い、遁世して高野山にのぼり仏門に入るのである。

現世にある者が地獄の苦患を目のあたりにする話は、同じ『剪灯新話』に「令狐生冥夢録」があり、それを翻案した『伽婢子』の「地獄を見て蘇る」(巻四)の先蹤があった。

この話の主人公浅原新之丞は儒学に走り仏教を信ぜず、地獄の存在を嘲笑したりしている。その新之丞が閻魔の使いに引き立てられて地獄につれて行かれ、その恐ろしい状を見せられる。後に許されて娑婆に帰るが、自分のこれまで所為を反省して、「願はくは地獄の有様を見せて我に愈々信を起さしめ給へかし」と、自ら求めて地獄に赴く。すると山海で猟漁殺生をほしひまにした者、夫に毒を盛りその妻と密通した医者、戒律を犯した尼僧等々、それぞれに現世で犯した罪科で地獄の苦しみを余儀なくされた者たちの悲惨の姿であった。

さて、この主人公の名が浅原新之丞、「牡丹灯籠」のそれが萩原新之丞、いずれも新之丞であったことに徴しても、了意は「牡丹灯籠」で省いた末段をこの「地獄を見て蘇る」に委ねようとしたのではなかったかと思われる。もちろん「地獄を見て蘇る」は「令狐生冥夢録」の忠実の翻案であったとは言うまでもないが、了意が「牡丹灯籠」の末段を何らの形で翻案したとすれば、或いは「地獄を見て蘇る」と同趣の翻案になり得たかも知れない。あの末段はそれだけで十分に地獄物語として独立させることの出来るものであったのである。

かくして「牡丹灯籠」の翻案は、女の執念の激しさを主題とする幽霊物語と、地獄の状を見せるなどして仏教的教誡を説く地獄物語の二つに分かれて浮世草紙時代を終わることになる。そしてこの二つはやがて読本時代に入ると、前者は上田秋成の『雨月物語』(安永五)の「吉備津の釜」に発展し、後者は都賀庭鐘が『英草子』(寛延二)で「紀任重陰司に至り滞獄を断ぐる話」をなす手掛りとなるのであるが、いずれにせ

よ「牡丹灯籠」は今後は読本という新しい小説形式の中で生かされて行くことになるのである。

(注1) 「芭蕉の葉の美女」(『鬼趣談義』)

(注2) 「玉すだれ」をめぐって」(『日本文学』一九八二・七)

(注3) 「百物語と牡丹灯籠怪談」(叢書江戸文庫『百物語怪談集成』月報)

(注4) 「唐小説と剪灯新話」(『唐代小説の研究』)